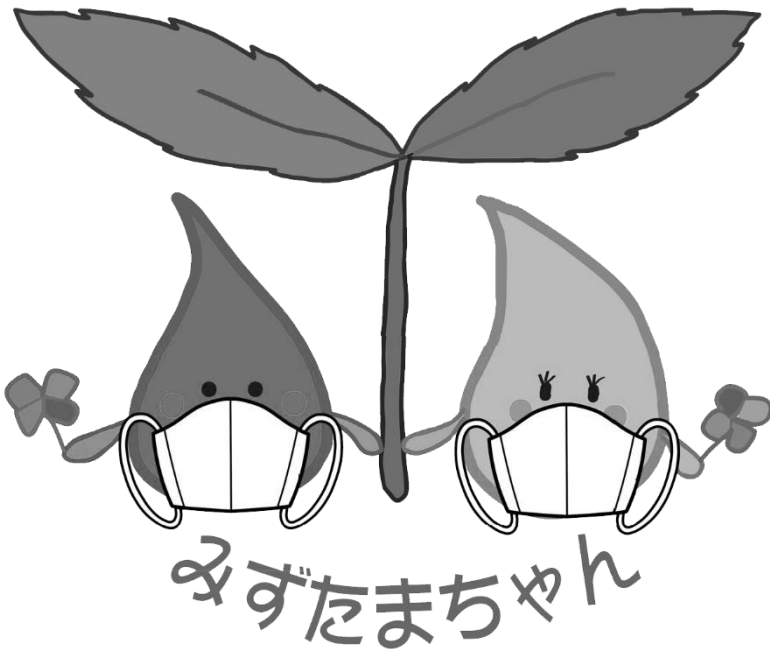


第34回

開成町福祉作文コンクール

入選作文集



社会福祉
法人

開成町社会福祉協議会

福祉作文コンクールは、「ともに生きる福祉社会づくり」をめざし、次代を担う町内在住の児童・生徒を対象に実施し、作文を通して社会連帯を基調とした福祉への理解と関心を深め、福祉活動への主体的参加意識を育成することを目的に行われております。

第34回を迎えた今回は、町内の小・中学校合せて287編の応募がありました。小・中学校別に、予備審査（校内）および町審査会を経て、優秀賞6編、優良賞4編、佳作10編を決定いたしました。

本作文集は、入選された20編の作文を掲載しております。どの作文も、自らの体験を通じて感じたことや考えたことが作者の言葉で書かれています。この作文集が大勢の皆様目に留まり、思いやり、助けあい、支えあいの気持ちで社会全体に広がっていくことを期待しています。

本コンクールに参加した小・中学生の皆さん、ご指導にあたられた先生方、ご家族の皆様、ご多忙のなか審査していただきました審査員の皆様に、心からお礼申し上げます。また、ご協力いただいた、開成町教育委員会、開成小学校、開成南小学校、文命中学校の皆様に深く感謝申し上げます。

令和4年10月

社会福祉法人開成町社会福祉協議会
神奈川県共同募金会開成町支会

審査にあたられた方々

順不同／敬称略

開成町教育委員会	小林裕史
開成町立開成小学校	皆藤洋史
開成町立開成南小学校	小原美紀
開成町立文命中学校	杉田俊介
老人クラブ連合会	小川周作
身体障がい者福祉協会	遠藤伸一
地域支援センターひまわり	大友崇弘
民生委員児童委員協議会	石崎雅美
開成町福祉介護課	奥津亮一
開成町社会福祉協議会	高橋政幸

第34 回開成町福祉作文コンクール入選作文集

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

福祉で、安心してよりよい生活を

開成南6年

川島 悠生
かわしま ゆい

…1

◆共同募金会開成町支会長賞◆

おじいちゃんのがんばり

開成6年

古澤なる美
ふるさ わなるみ

…2

◆開成町教育長賞◆

デイサービスに通うぼくから見た福祉

開成5年

安池 優斗
やすい けゆうと

…3

優良賞

温かい笑顔で…

開成6年

鈴木 美緒
すず き みお

…4

家族

開成6年

佐藤 陽斗
さとう はると

…5

佳作

ジェンダー平等について

開成南6年

井上慶一郎
いのうえけいいちろう

…6

あいさつは福祉

開成4年

小原那々星
こばるななせ

…7

音声訳を体験しました

開成南6年

矢内結佳
やないゆか

…8

福祉が関係ない人なんていない

開成南6年

風田川千咲
ふうたがわちさき

…9

ひいおばあちゃんとデイサービス

開成6年

西山千紘
にしやまちひろ

…10

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

広げよう、素直な心で

文 命1年

小野紗陽香
おのさやか

∴
11

◆共同募金会開成町支会長賞◆

知らない誰かのために今出来ること

文 命3年

松浦士恩
まつうらしおん

∴
13

◆開成町教育長賞◆

知らなかった事実

文 命3年

榎里香
えのきさとか

∴
15

優良賞

祖父が導く私の未来

文 命3年

小沼宥輝
こぬまゆうき

∴
17

「わたしのおばあちゃん」

文 命3年

中谷友美
なかたにともみ

∴
19

佳作

職場体験

文 命3年

石川 彩
いしかわあや

…
21

優しかったおじいちゃん

文 命3年

竹繁 楨祇
たけしげまき

…
23

僕の思う福祉

文 命3年

菅野 太陽
かんのたいよう

…
25

高齢者福祉について

文 命3年

山下 煌友
やましたおうすけ

…
27

全ての人が住みやすい町を作るために

文 命3年

石川 蓮翔
いしかわれんと

…
29

■ 作文の中、「障害」という言葉を「人や人の状態」を表す場合は、「障がい」と表記しています。

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

福祉で、安心してよりよい生活を

開成南小学校 6年

川島 かわしまゆい 悠生

私が初めて福祉を知ったのは、小学四年生のときでした。総合的な学習で福祉の勉強をしたときですが、しかし、私と福祉は特に接点がなく、社会の中で福祉がどのように役立っているかイメージが付きませんでした。

二年前に祖父が前立腺がんを発症しました。抗がん剤治療を始めて、祖父はだんだん体力がなくなっていました。祖母は毎日つきっきりで介護をしなければなりません。自力で立ち上がることが難しくなった祖父のためにトイレでもおふろでも祖母が祖父の体を支えなくてはなりません。私は、

体が弱る祖父のことと祖母の苦勞を思うと心配でたまりませんでした。

昨年末、病院の先生のすすめがあり、祖母はケアマネージャーさんに相談しました。それまで祖父は介護保険の「要支援」だったのですが、「要介護二」になりました。ヘルパーさんが祖父の介護を手伝ってくれることになり、祖母は介護の負担が大幅に減りました。また、家に手すりを設置され、祖父はそれにつかまって歩くことができました。車いすや歩行器を借りて、祖父は自力で歩くことができました。さらに、車いすに乗ったまま病院へ行くことができました。「介護タクシー」も使えるようになりました。介護サービスを利用し、祖父は自分でやれることが増え、祖母は負担が減りました。祖父母は安心して生活が送れるようになりました。これが「福祉」なのだとは実感しました。

祖父母の経験を通して身近なところで福祉が私たちを支えてくれていることを知りました。祖父母のように誰かが手をさしのべてくれると自分らしく生きられる人、安心してよりよい生活を送れる人がいます。今の私は、福祉が私たちの生活を守ってくれていると強く確信しています。

優秀賞

◆共同募金会開成町支会長賞◆

おじいちゃんのがんばり

開成小学校

6年

古澤 ふるさわなるみ
なる美

私の祖父は、子どもの頃に緑内障になり、徐々に目が見えなくなっていました。小学生頃から盲学校に通い、大人になってからは、針灸マッサージ師として働いていました。

一人暮らしをしている祖父に、私は時々会いに行っていました。祖父は全盲でしたが、一人で洗たく、ごみ出しなど何でも一人でやっていました。私は、母が「じいじは、人には負けないぞって気持ちでがんばっていたんだよ。」という言葉が心に残っています。祖父は人一倍たくさんのことをがんばっていたんだなと思いました。

私がお腹の調子が悪く気持ちが悪かったときに、針灸マッサージをしていた祖父にマッサージをしてもらったことがあるのですが、すぐに気持ち悪い

のが治ってびっくりしました。他にも祖父がよく、献血をしていたと母から聞きました。「何で献血をしていたの」と私が母に聞くと、「自分が色んな人に助けてもらってきたから、恩返しをするためだと思うよ。」と言っていました。祖父は、「人に迷惑をかけたくない」という気持ちが強く、だれにも弱音を吐きませんでした。今思うとすごく強い人だったのだと思いました。そんな祖父は、去年の一月に亡くなってしまいました。

祖父がたくさんのことを人一倍がんばってきたことをたくさんの人に知ってもらいたいと私は、思っています。私は、将来福祉の仕事に関わって、だれかを支えられる人になりたいです。

優秀賞

◆開成町教育長賞◆

デイサービスに通うばかり見た福祉

開成小学校

5年

安池 優斗
やさしいゆうと

福祉とは、と考えた時に何も思いつきませんでした。
た。

そこで、辞書を使って調べてみました。そこには、
福祉とは幸福、特に多くの人々に同じように与えら
れるべき物と福祉事業と書いてありました。

福祉事業とは何か調べてみました。すると障害者
用施設や高れい者用施設や放課後デイサービス
等々と書かれていました。

ぼくは、「あっ！」とおどろきました。なぜかと言
うと、今ぼくが通っている放課後デイサービスが福
祉事業の中の一つに当てはまるとわかったからで
す。

ぼくが放課後デイに通いはじめたのは、小学校一
年生になってからです。そのころは、なぜ自分が放

課後デイに通っているのかわかっていませんでした。

放課後デイでは、一週間ごとにプログラムが決ま
っており、生活週間や読書週間や工作週間や買い物
週間等々があります。そのプログラムの中でも一番
得意なのは、工作でアイロンビーズを使って立体の
物を作ったり、さいほうが得意なのでミニまくらを
作りました。

逆に苦手なのが読書週間でみんなの前で本を読
む事がきんちようしてしまうからです。でもそんな
時は、スタッフの人が優しく声をかけてくれて「次
にがんばればいいよ。」と言ってくれます。

ぼくにとって放課後デイは、安心できる場所です。
小学四年生の時にお母さんから、「優斗の得意な
所や苦手な所を勉強しに行くために通っているん
だよ。」と教えてもらいました。

放課後デイに通っている友達は、みんな一人一人
得意な事も苦手な事もちがうと思いました。でもス
タッフの方々や友達と協力する事で、できる事がふ
える度に自分の自信につながる事が幸福、福祉なん
だと思いました。

優良賞

温かい笑顔で…

開成小学校

6年

鈴木 美緒 すずき みお

私には、もうすぐ九十五歳になる曾祖母がいます。私は曾祖母と一緒に住んでいませんが、この一年で曾祖母に起きている変化に気がつきました。例えば、歩きづらくなったことです。足が上がりにくかったり、ふらふらしやすかったりします。そのような時は、ゆっくりでいいよと声をかけたり、段差があることを知らせたり、手をつないで体を支えてあげたりしています。また、あまりごはんを食べなくなりました。そのような時には、脱水にならないよう飲み物やアイスクリームなどをすすめ手渡したり食べやすそうなパンなどを近くにおいてあげたりしました。

このように曾祖母のためにしてあげることもあります。実は逆に私が曾祖母から言葉だけでなく、気持ちや力などももらっているものや教えてもらっ

ていることがあるということに気がきました。例えば、私がとなりに座ったときや、あまり動いていなくてお腹が減らないはずなのに、私がすすめたものをどうにか食べようとしてくれたときに感じます。私がとなりに座ったとき、笑顔を見せてくれて嬉しいし、感謝の気持ちを忘れないということが伝わってきます。どうにか食べようとしてくれると一生懸命生きようとする力も伝わってきます。このようなことから曾祖母が居てくれることで、私も頑張ろうという気持ちがわいてきます。

これからも、曾祖母が困っていることがあれば私が手助けしたり、曾祖母がいつも笑顔ですごせるように、たくさんお話ししたり、となりに座ったりしてあげたいと思います。私は大好きな曾祖母に元気で楽しい日々をすごしてほしいです。そして、その温かい笑顔で長生きしてほしいです。

優良賞

家族

開成小学校

6年

佐藤 陽斗
さとう はると

ぼくには、弟が二人います。そのうちの一人は、ダウン症でうまく言葉がしゃべれなかったり、やりたいことをうまくできなかったりする時があります。支援級にいて、四年生だけど、三年生くらいの勉強をしているので、「なんでかな」と思い調べてみることにしました。

ダウン症とは、みんなよりも成長がおそかったり、言葉の始めなどがふつうの子どもよりおそく、うまく言葉を言えないことがあるそうです。ぼくは弟のことを想像し、すごくなっ得しました。なので、支援級にいて四年生だけど二年生とか三年生くらいの勉強をしているのです。他にも自分でやろうとして、できなかったことがある時に、「手伝って」と言うのがあまりできないことがあります。そんな時ぼくは、「手伝ってと言うんだよ」と教えてあげるこ

とをしています。難しくても、できないことも、みんなよりいっぱい練習すれば、とても時間はかかるけど、できるようになります。できなかったことが、できるようになった時は、みんな喜んで、できるようにになったことを、いっぱいほめています。

この世界には、いろいろな障がいをもった人がいると思います。弟はダウン症でも毎日とても楽しくくらしています。困った時は、助け合えばどんなこともできます。少しの助けがあればいいのだとぼくは思います。もしそのような人がいたら、ぼくは温かい目で見守り、困っていたら「手伝いましょうか」と声をかけたいです。また、弟はこれから先もできないことや、分からないことがいっぱいあると思います。弟にはできない時は自分で「手伝って」と言えるようになってほしいです。これから家族みんなで仲よく、幸せにくらしたいです。

佳作

ジェンダー平等について

開成南小学校 6年

井上 慶一郎
いのうえけいいちろう

私は今、髪を伸ばしています。性別は男です。髪を伸ばすことに、一つ悩みがあります。それは、周りの反応です。

私は別に「女の子になりたい」だとか「男の子である自分が嫌だ」と思っているわけではありません。へアドネーションに興味があるわけでもありません。

では、なぜ私が髪を伸ばしているのでしょうか。答えはいたって簡単、髪を伸ばしたいからです。五年生の頃、そう思うようになりました。六年生の春、新しいクラスになってからは髪のことについて話す友達が増えました。「女子になりたいの?」「ヘアドネーション?」などと聞いてくるのです。私はただ髪を伸ばしたいだけなのに、このような反応があ

るのは、「ジェンダー平等の基盤」がまだ完成されていないからです。

SDGs（持続可能な開発目標）の五番目の目標でもある「ジェンダー平等の実現」。これは、私たちの生活において大切なものです。

もし男女が不平等だとしたら、どうでしょうか。おそらく好きな服が着れなくなってしまうでしょう。将来の道も制限されてしまいます。

このように、ジェンダー平等は、基盤となるものがあるからこそ成り立つものなのです。髪を伸ばすことも、様々な種類の服を着ることも、その人の自由です。もしあなたの周りにスカートを履いている男性、自分を男だと思っている女性がいても、何も気にせずに自然に対応してほしいと、私は願っています。

佳作

あいさつは福祉

開成小学校

4年

小原 那々星
こばる ななせ

わたしは、登下校中に近所のおじいさんとおばあさんに毎日あいさつをしています。小学校に入学した時に、三年生だったお兄ちゃんは元気にあいさつをしていたので、わたしもいっしょに始めてみました。

最初は、はずかしくて大きな声が出せなかったけど、あいさつは毎日つづけました。そのうちにおじいさん達と会話をするようになりました。

「今日の給食なにが出たの。」

「学校で何のじゅ業があったの。」

と、聞かれたので学校の様子を話しました。

四年生になった今は、

「あいさつしてくれると元気が出るよ。」

「お話しできるとうれしいな。」

と、よろこんでくれます。

わたしはまだ四年生なので、福祉とは何かと考えたけど、少しむずかしいです。なので、学校で勉強した事を思い出してみました。

「ふ」だんの

「く」らしの

「し」あわせ

わたしが毎日あいさつや会話をすることで、おじいさんやおばあさんがよろこんでくれています。これも福祉なのかなあと気づきました。だからこれからもあいさつは、ずっとつづけていきたいと思いました。

佳作

音声訳を体験しました

開成南小学校 6年

矢内 結佳^{やない ゆか}

私は、七月二十六日の火曜日に、友達と、福祉会館で行われた音声訳の体験に行きました。私が、今回音声訳の体験をもうしこんだ理由は、私も放送委員なので、話すことに興味があるからです。ちなみに、音声訳とは、視覚障がいの人などの、「視覚」から情報を受け取ることが難しい人達のために、文字などを言葉にして必要としている人に送って伝えることです。開成町では、具体的に、かいせい音声訳ボランティアの会の方達が毎月の広報のおしらせ版を、音声にしてパソコンで送っているそうです。そこで、なぜ、音声訳をするものが広報なのでしょう？私は、町の大切な行事や、これから起きることを知っておかないと、やるべきことが実行できなくなるからだと考えました。音声訳をする上で大変なことは、聞いている人に正確に情報を伝えるため、

漢字・名前・地名の正しい読み方を調べることだそうです。

私が実際におしらせ版を読んでもみると、すごく難しかったです。例えば、漢字がたくさんあるところや、は行、き行のところが難しくて、練習の時に何回もかみそうになってしまいました。また、「7」を「しち」と読むのではなく、必ず「なな」と読むことも慣れていないので、難しかったです。私が間ちがえないように気を付けたことは、聞いている人が、聞きやすい速度と聞きやすい声で読むということです。

これらのことから、かいせい音声訳ボランティアの会の方達は、毎回すごく大変な作業をしながら音声訳をしていると分かって、すごいなあと思いました。

佳作

福祉が関係ない人なんていない

開成南小学校 6年

風田川 千咲
ふうたがわちさき

「障がい者なんて、高齢者なんて、私には関係ない。」九才の頃まではそう思っていました。でも、それは大きな間違いであり、とても失礼なこと。今ではそう思います。

四年生の時、福祉の勉強をしてから私の考え方は変わりました。一番最初の授業で、先生が黒板の真ん中に「福祉」と書いた時「これは何？」と思いました。先生は四年三組の私たちに、

「福祉って何だと思う？」

と質問してきました。「何？私には関係ない。」それが、私が最初に思ったことです。

「車椅子とか、障がい者とか？」

「高齢者も関わっているよね？」

クラスみんなはどんどん考えを言います。

「そうか、障がい者ねとか高齢者ね……」なんだかモヤモヤした気持ちになりました。

やがて、車椅子体験・アイマスク体験が行われました。私は体験した時こう思いました。「これで毎日生活するのは大変だ……。私たちが生活のお手伝いをすれば、少しでも生活を楽にしてあげられれば……。」障がい者の方、高齢者の方の大変さを知りました。なんだか分厚い壁の前に立っているようでした。

私は、家で少し福祉について調べてみました。聴覚障がい者の方との手話体験。高齢者の方と昔遊び色々な活動がありました。私は、とても興味を持ちました。そして、福祉が関係ない人なんていない。そんなことも学びました。

これらは、私が四年生の時に体験したことでした。「福祉なんて自分には関係ない。」そんな考え方をする人を変えられるように、私は福祉についてもつと学びたいと思いました。

佳作

ひいおばあちゃんとデイサービス

開成小学校 6年

西山 千紘
にしやまちひろ

私には今年九十一才になるひいおばあちゃんがあります。日中一人で過ごしていて、物忘れなどが多くなってきたのでデイサービスに通うようになりました。

私はデイサービスという言葉の意味を知らず、調べてみたところ「施設に入所せず、昼間に日帰りで利用できる通所介護サービス」ということが分かりました。もつとくわしく知りたくなって、ひいおばあちゃんに会った時にデイサービスでいつもどんなことをしているのか聞いてみました。ひいおばあちゃんは週に二日、八時間ぐらい利用していて、そこでは体をそうをしたり、施設の人の話を聞いたり、ぬり絵やゲームをして過ごしているそうです。そのデイサービスには、近所に住んでいる友達もいたり、そこで仲良くなった人達もいて、友達と一緒に

話すのがとても楽しみと言っていました。デイサービスではお風呂にも入らせてくれて、職員の人がかみの毛を洗ってくれたり一人で着替えが大変な人の手伝いをしてくれるそうです。デイサービスに行く前のひいおばあちゃんは夜まで一人で過ごしていました。たまに遊びに行くと「一人でさみしい。」と話していたので、デイサービスの話を聞いた時に「友達と話すのが楽しい。」「デイサービスは楽しいよ。」と言っているひいおばあちゃんを見て私は安心しました。

今回デイサービスの事を知って、お年寄りが楽しく過ごせて家族の負担を減らせる素晴らしいサービスだと思いました。ひいおばあちゃんはデイサービスで「友達と話すのが楽しい。」と言っていました、たまに遊びに行くと、とても喜んでくれているので、これからはもつと話をしたり聞いたりしようと思いました。これからも、ひいおばあちゃんには元気で長生きしてほしいです。

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

広げよう、素直な心で

文命中学校 一年

小野 紗陽香
おの さやか

皆さんはリバースエデュケーションという言葉を知っていますか？これは「逆向き」の学びと言われるもので私は本で知りました。聞いたことがない言葉だったので調べてみると、子供達が学校などで習ったことや体験したことを、親や身近な大人に伝えることで、新しい考えが伝わる教育で、子供の素直な言葉のおかげで平等や公平のきっかけになりやすいそうです。私はある体験を思い出しました。

私の祖母は介護施設に入所しています。コロナ禍でなかなか面会できないので、ほぼ毎週手紙を書いて施設の人経由で渡してもらっていました。しかしある時、年齢のためか、祖母がだんだんと私の手紙を読むことが難しそうになってきていると聞き、残念に思いながらも仕方ないのかなとあきらめていました。そんな時、施設の方から「もしよろしければ…」と、ある提案を受けました。それは施設の方が祖母に私の手紙を代読して下さるというものでした。最初は「他の人に手紙を読まれるのは少し恥ずかしいな。」と感じたのですが、やはり祖母と交流したいので、思いきってお願いすることにしました。私の他愛ない日常が書かれた手紙を読んでもらう祖母。施設の方はその時の様子を動画に撮って下さり、私たち家族に見せてくれます。祖母は時々笑顔を見せたり、二言、三言手紙の感想を言ってくれたりします。祖母の元気な様子を見られて、嬉しいひとときです。私は思いきってお願いしてよかったなと思うのと同時に、施設の方にとっても感謝しました。

ほんの小さなきっかけが百八十度、世界を変えることがあります。あきらめかけた私に施設の方が投げかけてくれた言葉の光に心がほっとあたたかくなりました。

私はこの体験から自分にもできることはないか調べてみました。

以前は障がいとは個人の能力・機能によって起こるものとして、障がいのある人が味わう社会的不利はその人個人の問題とされていたそうです。しかし現在はそれは社会の仕組みや制度が作り出すとする考え方が主流となっています。それを知り、私は眼鏡についての話を思い出しました。

もし眼鏡がなければ、日本では約七千万人の人々が不自由な生活になってしまうそうです。それほど眼鏡の使用はあたりまえです。では、車椅子はどうでしょうか。もし建物に階段しかなければ車椅子使用者の人は上の階には行けません。車椅子に乗っているから上の階に行けないと思うか、建物に階段以外がないから行けないと思うか、今は後者の考えが主流です。このエレベーターのない建物をバリア、そ

してこの場合のそのような建物をなくすことをバリアフリーというそうです。バリアは環境だけでなく私たちの偏見なども含まれます。環境の整備にはすぐにできないこともあるでしょう。しかし心のバリアフリーは小さなきっかけですぐに行うことができますと思います。祖母の施設の方が声をかけてくださったように、私もそんな時には小さなことから始めてみようと思います。まず少しの勇氣を持って、そこから学んだことを周りの大人に話せたら、それがリバースエデュケーションになると思います。今までも無意識にそうしていたと思いますが、この言葉を知った今からは、意志を持って私たち若い世代から小さなさざ波を起こし、やがて大きな良い波になるまで広げていきたいです。

「あなたの眼鏡すてきだね。」と同じように、「あなたの車椅子、いいね!」という会話がふつうにされる世界も近いかもしれません。

優秀賞

◆共同募金会開成町支会会長賞◆

知らない誰かのために今出来ること

文命中学校

3年

まつうらしおん
松浦 士恩

僕は小学校六年生の冬から髪の毛を伸ばし始めました。「ヘアドネーション」を行うためです。「ヘアドネーション」と言うものは、癌等の病気や、事故などで髪の毛を失ってしまった子供の為に切った髪の毛を寄付し、その髪の毛でウィッグを作り、無償で提供を行う活動のことです。僕はその為に三年間髪の毛を伸ばし続けました。寄付する髪の毛の長さは原則として三十一センチメートル以上の長さですが原則として定められています。おおよそ肩の下くらいまで髪の毛を伸ばさないといけないという事になります。そして、女兒向けのウィッグを作るため

には三十一センチメートルよりも長い髪を必要としており、自分は四十五センチメートル程を伸ばして寄付を行うことを決意しました。

自分がヘアドネーションをしてみたいと思ったきっかけは、元々自分の髪の毛が周りの人よりある程度長かったこともありましたが、一番は母の言葉でした。

「髪の毛を伸ばして、ヘアドネーションしてみない?」

そう言われた僕は、ヘアドネーションに興味を持ち、髪の毛を伸ばすようになりました。何より、自分の髪の毛がウィッグになり、ウィッグを求めている病気の人に届くという、知らない誰かの為に何かをしてあげるといふ、またとないチャンスだと思ったからです。

そんな知らない誰かが被り、日頃から使うような大事なものを自分の髪の毛が担うことになるので、髪の毛の状態を気にして過ごしていました。汚かったり痛んでいたりとウィッグをもらう側も良い気分はしないかもしれないし、もし自分がもらう

側だとすれば少しでもキレイな方が嬉しいと感じました。

こうして髪の毛を伸ばし始めましたが、様々な苦労がありました。男性が髪の毛を伸ばしていることに對して疑問に思う人が多く、理解してもらうのに時間がかかりました。中には自分の事を馬鹿にしてくる人もいましたが、人の為だと思って過ごしていました。

そんな日々を過ごし、ヘアドネーションをする日が来ました。最初は緊張していましたが、案外すぐ終わり、約四十五センチメートル程の束ねられた髪の毛が病氣等で髪の毛が無くなってしまった子供に届けられることになりました。この時、自分はヘアドネーションをして良かったなど、確かに思いました。そのウィッグを使用している子供に直接感謝をされることはありませんが、知らない誰かの為に何かをしてあげられた事が嬉しかったです。

ヘアドネーションをし、髪の毛を切った事について周りの人に触れられ、ヘアドネーションの事をもっと知ってもらい、理解をして欲しいと思いました。

ヘアドネーションというものは、確かに男性よりも女性が行う比率の方が圧倒的に高いですが、髪を伸ばすという行為は男性でも行うことができます。自分は環境に恵まれていた為、いじめ等の被害にあっていないという理由だけでいじめの対象になつてしまふこともあるはずです。そんなことが起きないように、誰でもヘアドネーションを行えるように、ヘアドネーションといった活動の理解を広めて行きたいと思いました。

人生の中、知らない誰かの為に何かをしてあげることが少なく、もしかしたら機会すらないような人もいるかもしれません。こういった誰でも出来るような活動も多く存在しています。自分から意欲的に活動に取り組もうとする気持ちが大切だと思いました。

優秀賞

◆開成町教育長賞◆

知らなかった事実

文命中学校

3年

榎 えのきざと
里香

みなさんは、「音声訳」について知っていますか？
音声訳とは、障がいなどによって視覚からの情報を得ることが難しい方々のために、文字などを音声に換えて情報を提供することです。

私は「かいせい音声訳ボランティアの会」の方々協力の「声の広報のできるまで」に参加し、音声訳の体験をしました。なのでその体験から学んだことについてを紹介していきたいと思います。

最初に、音声訳で一番大切なことは、「正しく読む」ということではないのです。私はそれを聞いた時、ハテナが頭の中をかけ巡りました。上手に読むとい

うことが一番大切だと思っていたからです。では、一番大切なことは何かと言うと、「正しく伝える・正しく伝わる」ことが大切なのだそうです。

例えばみなさんは、「七月」を何と読みますか？
「しちがつ」と読んだ人もいますし、「なながつ」と読んだ人もいます。音声訳では、「七月」の読み方は「なながつ」と統一されています。なぜ、「七月」は、「なながつ」に統一されているのでしょうか。

それは、「しちがつ」と読むと、「いちがつ」にも聞こえてしまう可能性があるからです。確かに、「しち」と「いち」では、発音が似ていますよね。「正しく伝える・正しく伝わる」ことが大切な音声訳では、こういった発音の似ている言葉の聞き間違えを防ぐために統一しているのだそうです。

さて、「書いてあることをできるだけ忠実に音声化する」ことが原則な音声訳。実は、「アクセント」や「イントネーション」も重要になってくるのです。例えば、「箸」と「橋」と「端」や、「居間」と「今」。「雨」と「飴」など、これらは、読みは同じですが、

アクセントをつけるところなどの読み方は違いますよね。なのでそこに気をつけて何回も確認するそうです。また、地名は、そこに住んでいる方々の読み方で、人の名前は、きちんと合っているのか、問い合わせをしたりすることもあるそうです。

私が、この「声の広報ができるまで」に参加した主な理由は、単純に、「音声訳について知りたかったから」です。そして、私は将来医療系の仕事につきたいと考えているので、将来につながるころがあるかもしれないと思ったのも参加した理由の一つでした。

「知りたい」という好奇心半分、「将来のためへの勉強」という気持ち半分で最初は参加していたのですが、次第に、「今の自分にも何か福祉のためにできることがあるのかもしれない。」と考え始めていきました。「私が知らないだけで、福祉への関わりは多種多様な形であるのかもしれない。」とも。

今回この「声の広報ができるまで」に協力してくださった「かいせい音声訳ボランティアの会」の方々の中には、「本よみママ」から、音声訳の講習を

受けてこのボランティアを始めたという方もいらっしゃるいました。音声訳のボランティアは、朗読ではないので感情豊かには読みませんが、「本読みママ」では感情豊かに朗読するそうなので、使い分けが大変そうだとも思いつつも、いろんな関わり方がるんだと改めて発見できました。

「ズバリ、やりがいは何ですか？」

と私が聞くと、ボランティアの方は、

「誰かの役に立ってるのかなと思うところがやりがいだよ。」

と笑って答えてくれたので、やはり福祉の原点には思いやりが溢れていると気付きました。

私は、日常生活で福祉のことについてあまり考えていなかったのですが、今回のことをきっかけに、今は幸せな社会のために自分には何ができるのかを考え、それを実行していきたいなと思っています。

優良賞

祖父が導く私の未来

文命中学校

3年

小沼 宥輝
こぬま ゆうき

二年前、私には七十七歳の祖父がいました。その前の年の暮れ、いつも元気だった祖父がお腹の不調が数カ月続いていると言いい、病院へ行くと病気を患っている事がわかりました。食べる事が大好きだった祖父は日に日に食べれる物が少なくなり、入退院を繰り返す様になりました。

その頃、コロナウイルスが流行し始めていたのでお見舞いに行く事ができませんでした。一人で病院で頑張っている祖父に少しでも元気になってもらうために私にできる事はないか考えました。一つ目、毎年山にふきを採りに行くと、私の家に泊まりに来ていました。入院前「元気になって退院したら今年も行こう。」と言っていたので、行く事のできない祖

父の代わりに、私は母に教わりながら初めてきやらぶき作りに挑戦し、動画を撮って祖父に見せました。二つ目、一人で寂しいと思い、親せき皆で寄せ書きをし全員の写真を沢山貼った色紙を作りました。祖父はうれしそうに看護師さん達にいつも見せていたそうです。そして三つ目は、ビデオ通話をしました。時々でしたが、話している姿や笑顔を見ると私の方が元気をもらいました。そして決まって祖父は「早く帰るからな。」と言っていました。病気はひどくなる一方でした。

祖父は余命宣告を受けました。その期間は長くはありませんでした。入院中、祖父がエンディングノートを書いている事を知りました。そこには、①弟に会いたい②(数ヶ月後に産まれる)初ひ孫を見た③孫が社会人になった姿を見たいと書いてありました。少しでも願いを叶えてあげようと「会いたい人に来てもらおう。」と叔父が言い、祖父も「家族皆に会えるから家が良い。」と言っていたので、退院し在宅療養に変える事にしました。祖父が退院した時、私はコロナの緊急事態宣言中で休校中だったの

で、毎日会いに行きました。会いたかった人が来てくれると、体が辛くても、満足そうな笑顔で話していました。私はその姿がうれしくて、ずっと続いて欲しいと思っていました。だけど、病状は悪化し祖父から笑顔をうばっていききました。

在宅療養なので、ケアマネジャーや看護師さんが訪問してくれていましたが、体力もなく、一人ではベッドから起き上がる事も歩く事もできない祖父の介護はとても大変そうでした。体を動かしたり、ベッドから移動するのは祖父にとって苦痛だったので、救急隊員の従子に教えてもらいながら、皆で協力してオムツや服の交換などをしていました。その中で私はどの様にしたらいいのかわからず、側にいて話す事しかできませんでした。それでも徐々に見て覚えて、保湿剤を塗ったりマッサージをしたり、点滴の交換の時には液をまぜ、管に空気がたまっていないか確認できる様になりました。そんな皆の介護に祖父も慣れてきた頃、訪問医さんにホスピスへ移るよう告げられました。

ホスピスに入院して数日後の早朝、祖父が危なく状態だという電話があり私達は病院に向かいました。病室に入ると親せきが全員いて、祖父の近くに行くとき息を引き取りました。とても悲しかったですが、私達が来るのを頑張って待っていてくれた気がして、「おじいちゃんありがとう。」と言いました。

私は祖父の介護を経験して、家族や周囲の人達が協力し合う事の大切さを知る事ができましたが、「私にももっと何かできたのでは。」と後悔しています。「私が大人で看護師や医者さんだったら力になったのに。」と今でも思います。なので、祖父の様な病気の人や介護の必要な人の側に寄りそいながら補助や看護をする、介護福祉士や看護師を目指したいと思っています。そして、少しでも多くの人々の力になりたいです。

優良賞

「わたしのおばあちゃん」

文命中学校

3年

中谷 友美 なかたにともみ

私は、認知症の祖母と一緒に暮らしていました。レビー小体型認知症というタイプの認知症で見えないものがみえてしまったり、歩くことがむずかしくなったり、睡眠中に行動異常をおこしたりします。調子の良い時は、「ともちゃん。気をつけていつらっしやい。」と声をかけてくれるとても優しい祖母ですが、調子の悪い時は、私のことが誰だか分からなくなってしまうたり、普段は絶対に言わないような暴言をはいたりしてしまいます。

そんな祖母をつきつきりで介護をしていたのが母でした。母は、夜中、毎日二時間おきに起きて排泄介助をしたり、祖母の発する暴言に対応していま

した。そんな母は日に日に痩せていき、とてもつかれているのが見ていて分かりました。

母や、日によって状態がまったくちがう祖母を見ていて私はいつしか祖母に対して「めんどくさい」と心のどこかで思うようになっていきました。調子のよい時、せっかく話しかけてくれたのに、とてもそつけない態度をとっていたと思います。こんな私の姿を見て父や母は、「あんたはいつも冷たい。」「もっと優しくしてあげて。」と口をそろえて言っていました。だけど私は、こんな対応を一年以上も続けていました。

夏休み中のある日、母と父が突然「おばあちゃん施設に入るから。」そう言いました。それを聞いた時、私は特に大きな反応をせず、「そうなんだ。」としか言うことができませんでした。

祖母が施設に入る当日、私は予定があり、お見送りをすることができませんでした。今考えれば、予定をけつてでもお見送りをすればよかった。せめて当日に言えなくても前日に、「いつてらっしやい。」この一言だけでもいえばよかったと思っています。

祖母が家からいなくなって一週間がたちました。一階にある祖母の部屋にいくと、いつもニュースが流れていたテレビは無くなって、大きいイスがポツンと部屋の真ん中においてありました。誰も座っていないそのイスをみて、初めて私は、祖母がいないということを実感し、それと同時に、もっと会話をすればよかった。もっと優しくすればよかった。と、もっともつとという思いがあふれて涙がとまりませんでした。心のどこかで、この先も祖母と一緒に生活する。そう思い込んでいた今までの自分にとっても後悔しています。「人は失ってから初めて大切なものに気づく。」といわれていますが、この言葉を強く実感しました。

新型コロナウイルスの影響で、祖母と面会できる日がいつになるのかは分かりません。いつ私のことを忘れてしまうのかも分かりません。分からないことだらけですが、これからの時間を大切にします。この気持ちを胸に、過ごしていきたいと思います。次に会った時は、施設の中でのおもしろい話でも聞いてみようかな。

佳作

職場体験

文命中学校

3年

石川 いしかわあや
彩

わたしのお母さんは障がいをもった方たちと一緒に仕事をしています。タオルを畳んだり、地域から頼まれた木工製品を作ったりするなど作業の仕事や、障がい者の方への昼食、間食の準備、送迎なども行っています。

その職場に私が体験に行った時の出来事です。

朝九時から、障がい者の方の家へ迎えに行きました。行った先には、目が見えず点字ブロックを頼りに白杖をつかって歩く人や、知的障がいの方など他にもいろいろな障がいをもった方がたくさんいました。

お迎えが終わり、車で施設へと戻ります。朝礼をし、その後は作業に入ります。お母さんとはなれて

しまった私はすごく不安でした。ですが、みんなとても優しく、「おじさんはね…」「私のね…」など自慢話や最近の出来事、職場でのお母さんの話など、たくさん聞かせてくれました。作業の手きわがとても良く、私が一つやっている間に三つ終わらせてしまう方たちもいました。その時には、コツや、やり方など丁寧におしえてくれました。

十二時になり、昼食の時間となりました。お母さんのように社員、介護士を中心にみんながはこび、その仕事をしっかりとこなしていました。食べる時には障がいを持っている、持っていないは関係なくみんなと一緒に楽しく食事をしていたのを覚えています。

一時半に散歩に出かけました。そのコースには点字ブロックはほぼない事に加え、でこぼこしていたり、坂道だったり目が見えない方からしたら少し難しい道でした。ですが、手を組んだりつないだりしながら、目の見えないことがうそだったかのようにな軽快な足取りで歩いていました。

あつという間に一日が終わり、家へ送る時間となりました。私もついていきました。そこで下りる時に「また来てね」とみんながいつてくれたことがとてもうれしかったです。

私はこのたった一度の体験ですが、考えがガラッと変わりました。

今までは自分とは少し違う、大変そうとよくない偏見ばかり持っていました、そんなことは実際なということに気づきました。

なにかできなくても、それを補うことのできる仲間や特技を必ず持っているということが分かりました。

こんなにもかっこいい方を差別するのではなく、みんなが生活しやすく生きやすい環境をつくることがとても大切だと思いました。

佳作

優しかったおじいちゃん

文命中学校

3年

竹繁 楓祇
たけしげ まき

自分には、すごく優しいおじいちゃんがいました。そのおじいちゃんは、数年前に「がん」という病気になる入院、退院を何回か繰り返していました。自分はサッカーのクラブチームの活動などで直接病院にお見舞いには行けなかったものの退院したときには、家に行き、「こんにちは、おじいちゃん元気？」と話すようにしていました。しかし、退院した後だからかおじいちゃんから返ってくる返事は小さく弱々しいものでした。それでも返事が返ってくるだけでも、自分としてはうれしかったです。

それから月日が流れ、また入院と退院を繰り返したとき医者の人から「長く生きて半年から一年で

す。」と余命宣告をされてしまいました。それを耳にした自分は辛かったです。

そして、退院したおじいちゃんに会いに行くとおじいちゃんは前よりも弱々しくなっていて介護用のベッドで横になっていました。そんなおじいちゃんにいつもどおり、「こんにちは、おじいちゃん元気？」と聞くと前よりも小さく返事が返ってきたが声は辛そうでした。返事が返ってきたので少し安心したものの心配なので、できるだけ会いに行ける時は行き、少しでも長く一緒にいるようにしていました。

それから、三カ月たった頃おじいちゃんは息を引き取りました。その頃、遠征に行っていた自分は帰って来て早々その事を知らされショックを受けましたが信じられませんでした。そしてすぐに家へ向かうとそこには、おじいちゃんの遺体がありました。おじいちゃんの顔は、苦しそうではなく気持ちよく寝ているようで、本当は生きていてそのうちスッと起きるんじゃないかと思いました。ですが、「おじいちゃんに触ってみる？」と言われ、触ると冷たく改

めて「おじいちゃんは。」と実感しました。そのあと自分はおじいちゃんと思い出話をしていました。

そこから数日が経ち葬式の前日、おじいちゃんを棺の中へ入れる時、いところが手紙を読み上げたとき、涙が止まりませんでした。

そこで自分は今までを振り返ると「おじいちゃんのために、もつと何かができたんじゃないか。」と思います後悔しました。

次の日、式場には自分が知らない人がたくさん来ていて、その人達がおばあちゃんと話をするたびに「優しかった」などの言葉を口にしていたので、「おじいちゃんは本当に優しかったんだな。」と思いました。自分は幼い頃からおじいちゃんに愛情をたくさん注いでもらっていたので、「おじいちゃんのような人になりたい。」とこの時強く思いました。

そして式が終わり、おじいちゃんの家へ向かい、線香をあげ自分の家へ帰りました。

今回の出来事を通して自分はおじいちゃんから大切な事をたくさん教わりました。

また、それを絶対に忘れないようにするのとおじいちゃんに天国で会いたいので今まで以上にもつと優しく、親切にして人間性を磨いて今を生きたいと強く思いました。

佳作

僕の思う福祉

文命中学校

3年

菅野 太陽 かんのたいよう

僕は時々こう思うことがあります。

「福祉とは何か、バリアフリーとは何か。」

点字ブロック車椅子トイレなど、より多くの人があります。手すりがついていたり、電車に優先席があったり、シャンプーとトリートメントの区別がつくように容器に凹凸がついていたり、エレベーターには高い位置と低い位置にボタンがつけられていたり、数えていたらきりがありません。きつと目の不自由な方は、点字ブロックや音楽案内が、また車椅子を利用している方は、エレベーターやスロープがあることにより、何もないよりは、ずっと生活しやすくなったのではないかと思います。しかし、一

般的に「バリアフリー」といわれているそれらのものは、本当に、全ての人が、障がい（バリア）を感じることなく使用することができるのでしょうか。

例えば点字ブロック。目の不自由な方にとって、道しるべとなる大切なものなのだろうと思います。駅のホームでは、生死をわける線であり、階段の始まりと終わりを知らするためには、必要不可欠です。しかし、小さな子供を連れ、ベビーカーを押しているお母さん方にとって、点字ブロックがバリアになるかもしれません。ベビーカーがひっかかってしまうかもしれないからです。また、お年寄りの方にとって、点字ブロックはつまずきやすい段差かもしれません。車椅子の方も、もしかしたらバリアを感じて、その上を通過しているかもしれません。

また、車椅子トイレはどうでしょうか。車椅子の方にとって広くて使用しやすいのはもちろん、その中には「みんなのトイレ」と呼ばれ、赤ちゃんを抱いているお母さんや、大きな荷物を持った人も使いやすくなっているところもあります。例えば自分が骨折していると、普通の個室のトイレだと狭く

感じると思います。しかし、広いトイレは怪我をしている人でも使いやすいでしょう。そう、広々としたトイレは、誰が使用しても不都合がないのですごくバリアフリーだと思うかもしれません。本当にそうでしょうか。例えば、目の不自由な人が広いトイレに入ります。いつもとは違う広さです。戸惑うかもしれません。杖を置く場所がわからず壁に立てかけたとして、トイレは広いため杖は床に倒れてしまい、トイレの床を手探りで探さなければならぬかもしれません。

このように考えると、一見みんなが使いやすいように考えられたものに見えても、どこかでバリアを感じ、癢に障る人がいるかもしれないということが想像できます。僕には何ができるのででしょうか。誰もバリアを感じない点字ブロックや、トイレを開発し、世界中に広めるなんて大きなことは中学生の僕には到底できません。だから考えました。今の自分にできる福祉は何か。

そしてこう思いました。バリアフリーな物を作ることだけが福祉ではない。まず、バリアフリーな心

を持つて初めてものを創ることができる。だから、まず僕はバリアフリーな心を育てることから始めよう、誰と接する時も相手と自分の間にバリアを作らない、そんな心を持つてと思った。しかし今の僕は少し飾りたてた自分で本当の自分を覆ってしまう時があります。それではバリアを感じている人を助ける、バリアフリーな心を育てるところか目の前の人のことを理解することもできない。それで、今僕ができることはその心を育てるために本来の自分で接することができるようになることです。そして相手を理解し、自分も理解してもらうことでバリアをこわすことができると思います。そして、そんなバリアフリーの心が増えれば、バリアを感じて生きる人がいなくなると思う。

佳作

高齢者福祉について

文命中学校

3年

山下 煌友
やましたおうすけ

高齢者福祉とは、社会福祉の一つです。高齢者福祉は、長年にわたって社会の貢献に寄与し、豊富な知識と経験を有している高齢者が、敬愛され、生きがいをもって健康で安心した生活を送ることができるよう、社会全体で支えていくことを目的としています。

現在の高齢化、少子化の世の中で、高齢者福祉を考える割合は確実に増えています。

私も将来は高齢者になることから、今の内に高齢者福祉について勉強し、今の自分、そして高齢者に対してできることなどを勉強したいと思います。

私の伯母は老人ホームで働いており、その様子などを聞くことができます。

老人ホームには、身の回りのことができる人、できない人、良くしゃべる人、コミュニケーションが取れない人など色々な人が入所しているそうです。

老人ホームにも種類や条件があり、高齢者が希望すれば誰でも入所できるというわけではなく、高齢者自身やその家族によっても様々な理由で入所が困難になる場合もあるので、福祉のサービスを受けられる人、そうではない人がいることも教えてもらってわかりました。

伯母さんの話では、福祉の制度やサービス内容も大事ですが、高齢者と接する人も大事だと教わりました。

老人ホームでは、入所している高齢者と職員が密接にコミュニケーションを取り、友達のような関係を築いているということです。

ニュースでは、高齢者に対する虐待などが取り上げられることもあるため、伯母さんにも質問してみましたところ、言うことを聞かない人もいるし、約束を守らないこともあって頭に来ることもあるけど、みんなそうしたくてしているわけじゃないし、仲良く

やったほうがお年寄りも職員も気持ちがいいから、すぐに気持ちを切り替えて接していると話してくれました。

話だけではわからない部分もあるので、今度機会があったら、施設の見学などをさせてもらって、実際の高齢者福祉の現場を感じたいと思いました。

私はまだ中学生なので、高齢者福祉について真剣に考える機会は正直あまりありませんが、私の祖母は高齢者ですし、両親や私もいずれは高齢者になるので、実は身近な問題だと気付きました。

それに、高齢者福祉について考えなければいけないのは、若い世代だということにも気づきました。今の内から高齢者福祉に取り組むことは、将来の自分に返ってくることであり、その繰り返しによって充実した福祉が継続され、進展していくことになります。

今の私たちの世代が高齢者福祉に限らず、社会福祉全般について勉強し理解することが老若男女問わず生きやすい世の中を作っていくことにつながっていると思うので、高齢者福祉についてもさらに勉強し、

高齢者に対して自分ができることを考えていきたいです。

佳作

全ての人が住みやすい町を作るために

文命中学校

3年

石川 蓮翔 いしかわれんと

僕の家の近くに祖父母が住んでいます。僕が小さい頃、よく祖父母の家に遊びに行ったり、そこで従兄弟と集まってたくさんイベントを行ったりしました。その時に祖母はおいしい料理を作ってくれました。僕はその中で炊き込みご飯が好きでした。みんなでバーベキューをしたり、花火をしたり、旅行に行ったことがとても思い出に残っています。そして祖父母は、運動会やピアノの発表会など、僕のことを応援してくれました。今から二年半くらい前祖母は家の中で転倒して腰椎圧迫骨折をしてしまいました。その時の生活は今までと違い、起き上がったり座ったりすることさえも痛く、料理や洗濯などのことは一切できなくなっていました。この

転倒するという一つの出来事から今までの生活が一転しました。そして、今まで祖母がやっていた家のこと全てを祖父がやるようになり、料理や掃除などは母が手伝いに行くようになりました。この状態がしばらく続いたが、痛さが改善されず、役場に相談して、介護申請をして介護ベッドを借りることにしました。そのおかげで寝ることや起きることは楽になりました。その他に、床に座ることは難しいので、ソファやイスの生活になり自力で歩くことが危険なため家の様々な所に手すりを付けました。外出するときは杖が必要なので購入しました。この骨折は三カ月後に治ると診断されていたが、あまり良くならなかったのです。紹介状を貰い他の病院に行った結果、筋肉が徐々に固ってしまう病気になっていることが分かりました。そしてその2週間後にまた転倒してしまい肋骨にヒビが入ってしまいました。母に高齢者は転倒することが多いということを聞き調べたところ一回転倒し、そのまま寝たきりになる場合があったり、一度転倒した人は筋肉や骨が弱くなり何度も転倒を繰り返してしまうことがあります。

過去一年間に転倒したことがある高齢者は転倒したことがない人と比べ約三から四倍転倒しやすくなると言われているそうです。また、転倒による不安や恐怖で何事にも意欲がわかず、気力がなくなり、活動性が低下し、活動性の低下が転倒リスクの増加を招く悪循環につながっていくそうです。僕の身近でこういったことが起きたので、調べたのですが、こういうことは、高齢者が増えている今沢山起こってしまふことだと思ひます。つまり、高齢者が住みやすいように改善していく必要があると思ひます。例えば、家の中では、手すりを付けたたり、玄関などの段差をなくしたりすると生活しやすくなると思ひます。また、祖母は階段が辛いと言っていました。町の中では、ベンチを多く作る、車イスでの移動のため通路を広くする、急な坂や段差をできるだけ減らすと良いと思ひます。僕たちが普段使っているエスカレーターも高齢者からすると、タイミングが難しく使いにくいらしいです。自分はこれを便利な物だと思ひていたが、高齢者や体が不自由な人からすると危険な場合もあるのだなと感じました。今回、

このような問題に向き合つてみて、自分からの視点や考えでなく、高齢者、体の不自由な人の視点から考え全ての人が心地良く暮らせる町を作ることが必要とされていると思ひました。

中学生になつてコロナや部活であまり祖父母の家に行く事が出来なくなつてしまつたが、今まで応援してもらつた分を返してあげられるように、いろいろなことを手伝つたり、時々会いに行くようにしたいと思ひます。そして少しでも元氣でいてくれることを願っています。

開成町福祉作文コンクール入選作品集(令和4年度版)

令和4年10月発行

発行者 社会福祉法人開成町社会福祉協議会

神奈川県共同募金会開成町支会

〒258-0021 足柄上郡開成町吉田島1043-1 開成町福祉会館内

電話 0465 (82) 5222



この冊子は、神奈川県共同募金会の配分金を活用してつくられました。